

## 南谷幹夫先生追悼文集



南谷幹夫先生近影（平成 29 年 1 月ご逝去）

### 南谷幹夫先生を偲んで

南谷先生は東京大学の小児科医局の先輩ですが早くから都立駒込病院に移られていたので、先生とお付き合いは駒込病院を介してでありました。先生はわが国で初めてエイズの症例を発見し紹介された先達であります。エイズ (AIDS) は Acquired Immune Deficiency Syndrome (後天性免疫不全症候群) の頭文字をとって名付けられています。

わが国におけるエイズの第 1 例は駒込病院において南谷先生によって発見され、警告とともに報じられました。

当時「エイズの病原体はダニだよ。ミナミダニという新種のダニね」というジョークが仲間うちに飛んだことが思い出されます。

後年お腰の具合が悪くなられた後、小児感染症学会学術集会にも歩くのはつらいのだよ、とおっしゃりながらも来て下さり会場入口のところでニコニコと皆さんと談笑していらしたことも思い出します。

南谷先生はご一緒しているだけで安心できる温厚なお人柄で、ご退官後も長らくお付き合いをさせて頂きました。

改めてご冥福をお祈り申し上げます（平山宗宏）。

### 南谷先生の追悼

南谷幹夫先生は都立駒込病院、杏林大学などで臨床、教育、特に小児感染症を中心に活躍されるとともに厚生労働省、東京都などの感染症の取りまとめなどもされ日本の感染症、公衆衛生にご貢献されました。また日本小児感染症学会の前の 1 つの日本小児ウイルス病研究会の第 11 回（昭和 55 年）と第 16 回（昭和 60 年）を開催されました。

南谷幹夫先生とは私が東京大学附属病院小児科および関連病院の研修を終えて、藤井良知先生

のおられた帝京大学医学部小児科に移ってからの付き合いだと思います。藤井良知先生関連の飲み会、研究会でお会いし、「よう、頑張っているかい」とよく声をかけられました。そして私が現在の国立感染症研究所でエイズ関連の基礎研究をしていた当時は、南谷先生は都立駒込病院でしておられました。感染症の研究会などでお会いし声をかけていただきましたし、都立駒込病院が歴史的に感染症に果たしてきた役割についても教えていただきました。私が東京大学医学部に戻り、小児感染症学会の運営委員長にさせていただいた時は、平山宗宏先生とともに、大先輩として色々ご教示いただきました。南谷先生からは小児感染症学会を盛り上げるとともに東京大学小児科も感染症研究が盛んになることを期待され、その努力をなささいと言われました。後半においては期待に十分応えられなかったことを残念に思っております。南谷先生がご高齢になられ、担当されておられた幾つかの役を引き継がせていただきました。新しい方々との触れ合いの機会をいただいたと感謝しています。本学会がますます発展してきていることを喜んでおられると思います。合掌（牛島廣治）。

## 南谷幹夫先生の思いで

南谷幹夫先生におかれましては、平成 29 年（2017 年）1 月にご逝去されました。

先生は、本学会の前身の一つである、日本小児ウイルス病研究会当時より本学会の発展にご尽力され、日本小児感染症学会の機関誌である「小児感染免疫」の初代編集委員長をお務めになりました。

先生は、1926 年（大正 15 年）5 月にお生まれになり、昭和 24 年（1949 年）に千葉医科大学医学専門部をご卒業になり、昭和 26 年に東大小児科に入局され研鑽ののち昭和 31 年に藤井良知先生と共に、東京大学医学部附属病院分院小児科へ異動されました。そして、昭和 50 年から 63 年 3 月まで東京都立駒込病院感染症科に在籍されその後東京都三鷹保健所長としてご勤務されました。一貫して、ウイルス疾患の臨床と研究を続けられ、特に平成 5 年度より 6 年間、厚生科学研究費補助金エイズ対策研究事業 HIV 感染症の医療体制に関する研究班の主任研究者をお務めになっております。私自身は、昭和 51 年に東京都立駒込病院小児科に参りましたおりに、感染症科にご在籍の南谷先生に初めてお目にかかりました。医局の大先輩でありウイルス疾患の研究者として著名な先生にも関わらず、とても気さくな方で、青二才の私の他愛もない質問に丁寧に答えてくださったことを記憶しております。特に、私が出会った症例で、非即時型の牛乳アレルギーと思われる症例について、沈降抗体を測定すべくそのやり方を模索していたおりに、東大分院小児科の古色蒼然たる研究室をご紹介いただきましたが、よもやその後、私自身分院小児科にお世話になり、しかもその同窓会において再び南谷先生にお目にかかることになるとは夢にも思いませんでした。

分院小児科の同窓会の会長もなさっておりましたが、同窓会の中では、ミナミタニというお名前の発音が少し難しいこともあってか、先輩方は、ナンヤさんというように呼んでおられました。とても気さくな先生で、いつもニコニコと若い者へ接していらっしや、HIV 感染症の研究班を切り盛りされておられることもご自分ではほとんど吹聴されることは無く、今思えば、もっとお話を伺うことができれば良かったと残念に思います。晩年は脊椎管狭窄症のために、歩行が困難となられ、お亡くなりになるまでの数年間はお目にかかる機会もなく、分院小児科同窓会にて、先生は体はお元気なのだが外出を控えておられるようだとの噂をしておりました。改めて、色々な機会にお世話になりましたことを感謝申し上げる次第です（岩田 力）。

## 南谷幹夫先生を偲んで

南谷幹夫先生が亡くなられてもう2年6か月が過ぎようとしています、今も突然目の前に現れて「おい、岡部君。しっかりやってるか？がんばれよ！」と大きい、早口の声で叱咤激励を受けるような気がします。南谷先生とは、同じところで仕事をさせていただいたことはないのですが、常にご指導を受け、おだてられ、そしていろいろなところで引っ張り上げていただいたために、今の私があるような気が致します。

南谷先生（この場合はナンヤ先生と呼ばせていただきます）、本当に有難うございました。

先生に初めてお目にかかったのは、私が慈恵医大小児科での研修を終え帝京大学小児科に小児感染症の臨床と、ウイルス実験の手ほどきを受けに行っていた時でした。当時は小児感染症の分野での大御所であった藤井良知教授が東大分院から帝京大に着任された直後のことで、同じく帝京大に来られたばかりの中村健先生に連れられて東大分院小児科のウイルスラボを見学に伺いました。暑い日のことで、先生はアンダーシャツに白衣を着て、腕まくりをして（多分素足にサンダル履きと記憶しています）ガスバーナーを操作しながら細胞の継代か検体の接種をされていたと思います。今いうバイオセフティーもへったくれもないような実験室でしたが、臨床をやりながらのウイルス実験とはこういうものかと、文字通り熱のこもった現場を見せていただきました。この光景は後に母校に戻って一人で臨床検体からウイルスの分離を始めたり、国立小児病院でささやかながらウイルス実験室を立ち上げた時の、考えの基礎になりました。

その後藤井教授のお計らいで私はVanderbilt大学小児科ウイルス研究室に留学の機会をいただきました。しかし何をどうやっていいのか実は皆目見当がつかず、不安もあってDenverの経験を南谷先生に、Vanderbiltの経験を東大分院小児科に戻ったばかりの篠崎立彦先生に伺いに行ったことがあります。お二人とも「良知がいいと言ったんだから、いいんだ。やることは向こうに行つて教わればいい。」という、鷹揚というかいい加減なものでしたが、“自分のボスである『良知』がいいというからいいんだ”という、信頼に満ちた師弟関係を垣間見たような気がしました。私もできるだけ「〇〇がいいと言うならいいんだ」ということが言えるよう、言われるよう今でも努めているところです。

Vanderbiltから戻ってきた直後、南谷先生が現在の日本小児感染症学会の一方の前身である日本小児ウイルス病研究会（もう一方は日本小児感染免疫研究会）の第11回会長（1980年）の時でしたが、お目にかかった時に突然「そうだ、岡部君！せっかく戻ってきたんだから向こうで勉強したことをまとめて話さない。特別講演！」と、「えっ？」という私の思いでしたが、当然特別講演には若すぎるという声もあったそうで、南谷先生は「いいんだ。会長の俺がいいというからいいんだ。」という一言で決まり“Attenuated Cold-Adapted Recombinant Influenza A Virus Vaccines through Nasal Route”というテーマで、デビューをさせていただいたのも有難い思い出であると同時に、若い者にはできるだけチャンスを与えるということを教えていただきました。なおこの時のもう一つの特別公演は、米国NIHから戻ってこられたばかりの当時の予研ウイルス中央検査部（現在の国立感染研感染症疫学センターの前身）の山崎修道先生によるインターフェロン研究のお話でした。

私が国立小児病院感染科にいた時ですが、都立駒込病院小児科におられた南谷先生に当時の高度感染症隔離病棟を見せていただいたことがあります。お邪魔した先生の部屋の棚には、ご自分が書

かれた論文・総説の別冊を「レントゲンフィルムの空き箱」に整理され、ずらっと書棚に並べてあるのを拝見し、なるほど別冊はこのようなしておいとくものなのかと驚いたことがあります。以来、私は別冊を「積んどく」のはやめ、レントゲンの空き箱をもらってきては整理をしておくようになりましたが、昨今レントゲンの空き箱が手に入らなくなってから少しずつ整理が滞りはじめ、南谷先生申し訳なく思っている次第です。

小児科学会東京都地方会では、当時の済生会中央病院小児科部長の浦野隆先生と南谷先生が、交互に感染症の流行状況、トピックスを「感染症だより」としてお話をして下さるようになり、地方会に出席する楽しみの一つとなっていました。とくに南谷先生はたくさんのスライドで臨床情報と疫学情報を、あの早口で短時間で一気に紹介する圧巻の講演でした。私が感染研情報センターに移りしばらくたった時に、これも突然「岡部君！感染研のデーターをまとめて、地方会で紹介しなさい。」と言われました。最初は南谷先生と交互に担当をしていましたが、南谷先生の腰痛が強くなってきたため、私の分担が多くなり、やがて私と情報センターの小児科出身者（多田，谷口，多屋ら）で担当し、さらに現在の疫学センターの担当につながっております。南谷先生の情報量にはとても追いつくものではありませんでしたが、限られた時間内に必要と思われることをいかにきちんと情報提供するか、私にとっては大変良い勉強と経験となりました。

南谷先生、同じところで仕事をさせていただいたことはないのですが、小児科医として、臨床ウイルスを学び実践する者として、大きな大きな影響をいただきました。有難うございます。そのうち新しい別冊など抱え、一杯飲みに向いますので、よろしく願いいたします。

令和元（2019）年5月こどもの日

川崎市健康安全研究所 岡部信彦